

アカデミック・リテラシーからスタディ・スキルズへ、さらには初年次教育¹への展開

高松正毅

二つのあり方——精神論と方法論——

ここに二冊の本（新書版）がある。一冊は神奈川大学の『学問への誘い^{いざない} 大学で何を学ぶか²』、もう一冊が専修大学の『知のツールボックス 新入生援助集^{フレッシュマンおたすけ}』である。前者が大学で学ぶ心構え、いわば精神論を扱った書であるのに対し、後者は大学で学ぶ上でのテクニック、いわば方法論をまとめた書である。

これらには、完全には二分しにくい部分も含まれるが、分けて挙げることにする。

1. 大学で学ぶ心構え、または精神論に関する本

著者名	出版年	書名	出版社等	著者の役職等 (専門分野)
増田 四郎	1966	『大学でいかに学ぶか』	講談社 講談社現代新書78	元一橋大学教授・学長 東京経済大学教授 (西洋経済史)
加藤 諦三	1979	『大学で何を学ぶか 自分を発見するキャンパス・ライフ』	光文社 カッパ・ブックス 1985年に光文社文庫	早稲田大学教授 (精神衛生・心理学)
隅谷三喜男	1981	『大学でなにを学ぶか』	岩波書店 岩波ジュニア新書38	元東京大学・信州大学教授 東京女子大学学長 (労働経済学)
J. H. ニューマン 田中秀人訳	1983	『大学で何を学ぶか』	大修館書店	英国カトリック神学者

1 1年次教育や導入教育と呼ばれることもあるが、ここでは濱名篤・川嶋太津夫（2006）『初年次教育—歴史・理論・実践と世界の動向—』丸善 に従い、初年次教育とする。

2 目次だけなら、2002年版から2007年版まで見ることができる。http://www.kanagawa-u.ac.jp/04/bu_yoko_kihon/index.html

大学全入化時代におけるスタディ・スキルズ教育に関する基礎的研究

著者名	出版年	書名	出版社等	著者の役職等 (専門分野)
森 茂也	1984	『大学でどう学ぶか －新入生へのガイダンス－』	同信社 同文館出版発売	南山大学教授(イギリス価格論・古典派需給論)
渡辺 幸博	1985	『現代社会と知識 いま大学で何を学ぶか』	玄文社	関西大学教授(哲学)
講談社編	1985	『学生時代に何をすべきか』	講談社	
講談社編	1986	『学生時代の何が役に立ったか』	講談社	
講談社編	1988	『学生時代に何を学ぶべきか』	講談社	
講談社編	1990	『学生時代に何を確かむべきか』	講談社	
長野 倬士	1995	『大学で何を学ぶか 息子よ娘よ』	プレジデント社	(株)国際観光会館副社長
三田 誠広	1995	『大学時代をいかに生きるか きみたちは「やさしさ」を知らない』	光文社	作家 早稲田大学文学部非常勤講師
浅羽 通明	1996	『大学で何を学ぶか』	幻冬舎 1999年に文庫化	評論家 早稲田大学非常勤講師
中谷 彰宏	1996	『大学時代にしなければならない50のこと』	ダイヤモンド社 2000年にPHP文庫	文筆家
中谷 彰宏	1997	『大学時代に会わなければならない50人』	ダイヤモンド社 2001年にPHP文庫	文筆家
荒巻孚・朝比奈知彦	1997	『大学時代(キャンパスライフ)で人生は変わる』	ビジネス社	荒巻は専修大学経営学部教授(地球環境学)、朝比奈はビジネス作家・作詞家
鷲田小彌太	1998	『大学時代に学ぶべきこと、 学ばなくてよいこと』	PHP研究所 2003年にPHP文庫	札幌大学教授(哲学・倫理学)
講談社編	1998	『新・学生時代に何を学ぶべきか』	講談社	
岩波書店編集部編	2000	『大学活用法』	岩波書店 岩波ジュニア新書357	
安河内哲也	2000	『それでいいのか?大学生!』	ナガセ ナガセブックス	予備校講師

著者名	出版年	書名	出版社等	著者の役職等 (専門分野)
鷺田小彌太	2000	『「知」の勉強術 大学時代に何を学ぶか』	KKベストセラーズ ワニのNEW新書026	札幌大学教授（哲学・倫理学）
桜井 邦明	2000	『大学は何を学ぶところか』	地人書館	神奈川大学工学部教授 (高エネルギー物理学)
東京大学教養学部 センター運営委員 会編	2000	『大学で学ぶということ—21 世紀を生きる君たちへ—』	学会センター関西 学会出版センター発売	1999年6月2日～4 日、駒場キャンパス数 理科学研究科大講義室 で開催したシンポジウ ムの記録
飯田 史彦	2001	『大学で何をどう学ぶか』	PHP研究所 PHP文庫	福島大学助教授（人事 管理論・経営戦略論）
和田 秀樹	2003	『頭のいい大学四年間の生き方』	中経出版 2007年に文庫化	精神科医 大学受験勉強法研究者
中山 茂	2003	『大学生になるきみへ 知的空間入門』	岩波書店 岩波ジュニア新書452	元東京大学・神奈川大学 教授 神奈川大学名誉教授 (科学史)
山田 耕路	2005	『大学でどう学ぶのか』	海鳥社	九州大学大学院農学研 究院教授（食品科学）
浦上 昌則	2006	『“学生”になる！ 進学が決まった時に読む本』	北大路書房	南山大学人文学部教授 (発達心理学)

上記リストでは、書名に「大学」「大学時代」「学生時代」などを含み、大学で学ぶ者を対象に書かれたものに限った¹。青春の読書や、青年時代における社会勉強といった青年期の過ごし方となると、これら書目は大幅に増えるであろう。遺漏多きことと思う。大方の叱声を期待したい。

これら精神論書は、書き手の立場から二つに分類できる。一つは、功成り名を遂げた者たちが後進に向けて書いたメッセージ集、もう一つは大学の教員（非常勤講師を含む）が学生に向けて書いたメッセージである。

これら書目も、社会の変化や大学の変化と無縁ではない。内容の精査はこれからだが、小説家の三田誠広や評論家の浅羽通明らが大学の非常勤講師を経験し、出版を始めた1995～6年以降と、そ

1 学生向けとはいえ、キャリア開発・キャリアデザインに関するものは含んでいない。ニート・フリーターの増加が問題となる中、今後はこれらが増えてくることが予想される。なお、当然のことながら大学教員向け、たとえばファカルティ・ディベロップメント（FD）に関するものは含んでいない。

れ以前とで、分けることができると考えられる。

なお、大学が独自に発行する販売ルートに乗らない小冊子やパンフレットのようなものを、すべて把握することは困難である。

神奈川大学が1987年から毎年出版している『学問への誘い 大学で何を学ぶか』（上述）は、2006年度から同大学の「FYS（First Year Seminar）」の副読本として用いられている。

FYSとは、神奈川大学が2006年度から新たに導入した初年次教育科目である。新入学生（1年次生）を対象に、約4,300名全員を少人数のクラスに分け、“大学への入門”をセミナー（演習）形式で教育・指導するものである。入学年度の半期を使い、大学で学ぶための技能と視座の涵養を動機づけることを目的とし、具体的には、以下のような能力を身につけた学生の育成を目指すという³。

- (1) 大学で学ぶことの意味を理解し、自分を客観視することができる。
- (2) 教育課程を理解し、4年間の学修計画をたてることができる。
- (3) 学内の施設を知り、また学修支援システムを自立的・継続的・多面的に利用できる。
- (4) 図書館の利用により、独自に文献・資料等を検索または収集できる。
- (5) 既存の文書を指示された要件に従って要約・再構成でき、またレポートや小論文を所定の期限までに完成できる。
- (6) 事象や既存の理論に対して「問題」を発見し、また疑問を提示することができる。
- (7) これらの能力を応用して、付加価値の高いノートが作れ、また完成度の高いレポートや小論文を作成できる。
- (8) グループ学習に際しては、協調性をもって主体的に参画することができ、また意見を述べることができる。
- (9) プレゼンテーションに際しては、自ら資料を作成し、論点を整理し、所要時間内に口頭発表ができる。
- (10) 自らの能力を自己評価でき、新たな達成目標を設定することができる。

(4) (5) (6) (7) などが、我々の「論文の読み方・書き方」と関係の深いものである。なお、(8) (9) のオーラル面の訓練に関しては、別個に授業科目の設定が必要だと筆者は考えている。ディスカッションやディベート、プレゼンテーション等を「書く」ために行うことはあっても、「論文の読み方・書き方」の授業では、主とすることはしない。

3 「神奈川大学ホームページ」http://www.kanagawa-u.ac.jp/04/bu_yoko_kihon/index.htmlより引用。

2. 大学で学ぶためのテクニック、または方法論に関する本

著者名	出版年	書名	出版社等	備考
M. J. ウォレス 萬戸克憲訳	1991	『スタディー・スキルズ 英米の大学で学ぶための技術』	大修館書店	
森靖雄	1995	『大学生の学習テクニック』	大月書店	
A. W. コーンハウ ザー D. M. エナーソン 改訂、山口栄一訳	1995	『大学で勉強する方法』	玉川大学出版部	シカゴ大学テキスト
野村一夫	1995	『社会学の作法・初級編 社会学的リテラシー構築のた めのレッスン』	文化書房博文社	1999年に改訂版
ロン・フライ 金利光訳	1996	『アメリカ式勉強法』	東京図書	
東郷雄二	2000	『東郷式文化系必修研究生活 術』	夏目書房	
京都文教大学 臨床心理学科編	2000	『ザ・臨床心理学科 大学で何をどう学ぶか』	創元社	
藤田哲也編	2002	『大学基礎講座』	北大路書房	京都光華女子大学テキスト (平成13年度～) 2006年に改増版
学習技術研究会編 著	2002	『大学生からのスタディ・ス キルズ 知へのステップ』	くろしお出版	関西国際大学高等教育研 究所、平成13～14年度科 学研究費「大学入学時 におけるスタディ・スキ ルズの教材開発と運用に 関する研究」の研究成 果 2006年に改訂版
和田寿博・河音琢 郎・上瀧真生・麻 生潤	2003	『学びの一步 大学の主人公になる』	新日本出版社	
田中共子編	2003	『よくわかる学びの技法』	ミネルヴァ出版	

大学全入化時代におけるスタディ・スキルズ教育に関する基礎的研究

著者名	出版年	書名	出版社等	備考
塚谷正彦	2004	『脱フリーター宣言！ 大学生の生き方・考え方』	実教出版	
相川忠夫	2004	『大学入門講座』	東京図書出版会	
AERA Mook	2004	『勉強のやり方がわかる』	朝日新聞社	
岡地勝二	2004	『経済学部で何を学ぶか』	同文館出版	
北尾謙治 他	2005	『広げる知の世界 大学での まなびのレッスン』	ひつじ書房	
K. L. アレン編 伊藤俊洋監訳 伊藤佑子・黒澤麻 美・吉田朱美訳	2005	『スタディスキルズ 卒研・ 卒論から博士論文まで、研究 生活サバイバルガイド』	丸善株式会社	
家入葉子	2005	『文化系ストレイシープのた めの研究生生活ガイド』	ひつじ書房	
竹田茂生・藤木清 編	2006	『大学生と新社会人のための 知のワークブック』	くろしお出版	
中島祥好・上田和 夫	2006	『大学生の勉強マニュアル フクロウ大学へようこそ』	ナカニシヤ出版	
溝上慎一	2006	『大学生の学び・入門 大学での勉強は役に立つ！』	有斐閣	
武居一正	2006	『法学部新入生のための学ナ ビ』	法律文化社	
佐藤望編著 湯川武・横山千 晶・近藤明彦	2006	『アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入 門』	慶応義塾大学出版 会	
専修大学出版企画 委員会	2006	『知のツールボックス 新入 生援助（フレッシュマンおた すけ）集』	専修大学出版局	2003年より『学びの道具 箱』として新入生全員に 無料配布していたものを、 市販化にあたり改訂。
玉川大学コア・ FYE教育センター	2006	『大学生生活ナビ』	玉川大学出版部	小原芳明監修

次なるリスト（上掲）は、昨平成17年度の報告書『アカデミック・リテラシー教育に関する基礎的研究』「まえがき」の注2に掲載したものに、遺漏やその後出版されたものを加えたものである。

アカデミック・リテラシーからスタディ・スキルズへ、さらには初年次教育への展開（高松）

2002年に刊行された『大学基礎講座』と『知へのステップ』の二著を一つの契機とし、それ以降陸續と出版されているのが現状である。

方法論書には、当然のことながら、大学一般論ではなく、学ぶ内容や学部に特化したものが見られるのが特徴である。他にも優れた著作が多数あると思われるが、書名だけからの探索は難しかった。遺漏多きことと思う。こちらも大方の叱声を期待したい。

なお、専修大学の『知のツールボックス 新入生援助集』の内容は次のとおりである。

プロローグ 大学での勉強はこうなっている

第1章 話を聞き、ノートをとる

第2章 資料を探して集める

第3章 文章を読む

第4章 ひとと議論して考える

第5章 レポートを書く

第6章 プレゼンテーション

第7章 ネットのコミュニケーションを活用する

第5章が、我々「論文の読み方・書き方」担当者の中心的な課題だが、第2・3・4章も、「書く」ためには関連の深い部分である。

我々の授業「論文の読み方・書き方」は、アカデミック・リテラシー（学術的読み書き能力）を鍛えるための科目である。アカデミック・リテラシーは、大学におけるスタディ・スキルズ（学習技術）の一つに数えられるものであり、初年次教育においては必ず扱われる内容である。

次なる課題は、アカデミック・リテラシーをスタディ・スキルズの一つとして明確にとらえ、他のスキルとの連関を考えること。そして、初年次教育における位置づけを考究することである。